

'60年代ファッションに最も影響を与えた

# MARY QUANT マリー・クワントの革命

1960年代、イギリス発の若者文化「スウィング・ロンドン」を牽引したマリー・クワント。「ファッションでなりたいたい自分になる」。当時の女性たちはマリー・クワントの服を着ることで、ようやく旧来的な価値観から解放されたのだ。



マリー・クワントのカクテルドレスを着るリジー・デニス  
1960年ごろ Photograph by Woburn Studios  
Image courtesy Mary Quant Archive / Victoria and Albert Museum, London



マリー・クワントのブティック「バザー」のショッパーを持つモデル  
1959年 Image courtesy of Mary Quant Archive / Victoria and Albert Museum, London



マリー・クワントと、ヘアスタイリングを担当していたヴィダル・サスーン  
1964年 © Ronald Dumont/Daily Express/Hulton Archive/Getty Images



ベストとショートパンツのアンサンブルを着るツイッキー  
1966年 © Photograph Terence Donovan, courtesy Terence Donovan Archive. The Sunday Times, 23 October 1966

## Mary Quant

1930年、ロンドン近郊に生まれる。'49年、ゴールドスミス・カレッジに入学、美術などを学ぶ。卒業後、高級帽子店に勤務。'55年、ブティック「バザー」を開店。'57年、アレキサンダー・プランケット・グリーンと結婚。'63年、手頃な価格のライン「ジーンジャー・グループ」や「ウェット・コレクション」を発表。'65年には下着ブランド「ユースライン」を発表。'66年、大英帝国勲章(OBE)受賞。コスメライン発表。ダイジーマークを商標登録。'70年、インテリアライン発表。'71年、日本でコスメライン発売開始。'75年、国際的なライセンス業務に専念。2015年、2度目の大英帝国勲章(DBE)受賞。

「従来の社会規範を『グダヤ』『古い』態度とみなし、自分の欲求に忠実であること、自分らしさを貫くことがクワントにとってのセクシーだったと思います。社会の規範をもととせず、楽しんで自分らしさを貫くこと、それが結果としてセクシーになり、男性も魅了し、自分自身にもパワーを与えることにつながったのでは」

クワントは「衣服は、なりたいたい自分になるための表現手段」と何度も力強く言う。誰にも強制させない。私は、私の生きたい道を生きる。

「周囲が押し付ける規範など気にせず、時代のリズムと自然に合わせて活動できる、自分に嘘をつかない自分。思うこと、感じることをがまんすることなく解放、表現して周囲を幸せにできる自分。そんな自分を、好きな仕事を勤勉に貫くこと

マリー・クワントが解放したファッション

服を着るとき、つい考えてしまう。「このシャツを着たら、どう思われるだろう」でも、人からどう見られるかばかり考えていたら窮屈だ。もっと自由に、大胆に、自分のためにファッションを。1960年代、マリー・クワントが世界に革命を起す。それがメディアに登場したミニスカートだった。この歴史的一着が、女性たちを未来のスタイルへ導く。

なぜ、スカートの丈を短くしただけのシンプルな服が、当時のイギリスの女性たちに大きな影響を及ぼしたのか。現在、東京・渋谷「Bunkamura」ザ・ミュージアム」で開催中の「マリー・クワント展」の翻訳監修を務めた服飾史家、中野香織さんにお話を伺う。

「クワント以前のイギリスの女性は、『リスペクタビリティ(上品に見えること)』が重んじられ、自分の願望や欲求をおさえて、社会の規範に従うのが女性らしいふるまいとされました」

クワントはそれまで当たり前だった規範に、「No」を突きつけ、新時代の女性像を切り拓く。当時のクワントは頻りに「セクシー」と口にするが、彼女にとってのセクシーとは色気を振りまくものではなかった。



展覧会と同時期上映!

# 『マリー・クワント スウィング・ロンドンの伝説』

## 映画監督 サディ・フロスト インタビュー

Interview & text: Yuka Kimbara

「私の母はモデルで、16歳で私を生みました。母はクリエイティブで、3歳からモデルを始めた私にもミニドレスを作り、マリー・クワントのショップにも連れて行きました。ですから無意識のうちに私は'60年代のマリーのファッションに触れ、今も私の中に息づいています。」



photo: Bart Kuykens

10代で私はロックンロールとパンクに目覚めましたが、マリー・クワント(以下、MQ)のテイストが消えたかというところではなく、彼女の提唱したミニスカートは異なった形で受け継がれていました。大流行したタータンキルトのミニスカートもそうだし、'80年代の肩パッド入りのパワージャケットに大きなバックルのミニスカートを含ませるのもそう。モデルとして日本に滞在したときは、小柄だったのでショーにも出ました。MQの特徴はやはりその強さ。中性的で、遊び心がある。マリーのファッションは映画、音楽、写真と深く結びつき、労働者階級であっても気軽にアクセスできた。ライブハウスで踊るダンス一つとっても自由に自分を表現できる空気があり、そこで着る服がMQだった。服は着る人のアイデンティティそのものである。それがマリーの示したこと。後にヴィヴィアン・ウエストウッドが同じことを示しましたし、'80年代のボディマッピングの時代には川久保玲やアレキサンダー・マックイーン、ジョン・ガリアーノというデザイナーが同じ思想を強く持っていました。ブリットポップを牽引したバンド、パルプのPVに若い頃の私は出ましたが、当時のなんだったかオリジナリティで表現できるというワクワクした気持ちを今、若い人たちがどれだけ持っているか。私が次回作でモデルのツイッキーをフューチャーするのもそこにあります。

普段のマリーはとてもシャイで、パートナーのアレキサンダーは上流階級の出身らしく一日バジャマで過ごしたり、穴の開いた服や、服を裏返しのままで外に出る人でした。そういう天衣無縫なアレキサンダーが一目ぼれし、ファッション界のミュージズとなったのがマリーだったのです(談)

### Sadie Frost

イギリス・ロンドン出身。プロデューサー、俳優、ファッションデザイナー、作家の顔を持つ。フランシス・フォード・コッポラ監督『ドラキュラ』(1992年)などに出演。'99年、元夫のジュード・ロウなどと制作会社を設立。2012年、新たに制作会社ブロード・トゥ・ブラック・ピクチャーズを立ち上げ、ベン・チャールズ・エドワーズ監督作『Set the Thames on Fire』('15年)など映画開発や新人の後押しに専念する。



©2021 MOD FILM LIMITED ALL RIGHTS RESERVED



マリー・クワントと夫のアレキサンダー・マックイーン。Courtesy: Terence Pepper Collection

### STORY

20世紀で最も影響力のあるデザイナーの一人、マリー・クワントの初の公式長編ドキュメンタリー映画。ロンドン南西部のチェルシーのキングスロードで始めた伝説的店舗から、ファッション、ホームウェア、化粧品など世界的に展開する成功を収め、その後も時代とともに生きた彼女の生涯を克明に描く。同時代のデザイナーや現代ファッションのリーダーたち、そしてマリーの家族へのインタビューやアーカイブ映像などを用いた創造性あふれる作品。

ジャーゼイドドレス  
©Alamy/PSB  
ロンドン・ヴィクトリア・アルバート博物館展示の服



マリー・クワントのタイツと靴  
1965年ごろ Image courtesy Mary Quant Archive / Victoria and Albert Museum, London



マリー・クワントのカンゴール製ベレー帽の広告  
1967年 Image courtesy of The Advertising Archives



シャツドレスとショートパンツを着るクレー・ウィルソン  
1966年 Photo Duffy © Duffy Archive



ドレス「ミス・マフェット」を着る  
パティ・ボイドとローリングストーンズ  
1964年 Photograph by John French © John French / Victoria and Albert Museum, London

\*\*\*\*\*

「マリー・クワント展」  
2023年1月29日(日)まで。  
【Bunkamura ザ・ミュージアム】東京都渋谷区道玄坂2-24-1 地下1階  
10時～18時(金・土曜は21時まで、入館は閉館の30分前まで)  
※状況により、会期・開館時間等が変更となる場合あり。  
12月6日(火)、1月1日(日・祝)休館  
観覧料:一般¥1,700、大高生¥1,000、小中生¥700  
お問い合わせ TEL050-5541-8600(ハローダイヤル)  
※学生券(小学生は除く)には、学生証の提示が必要。  
※会期中すべての日程で【オンラインによる事前予約】が可能。  
予約なしでも入場できますが、混雑時にはお待ちいただく場合もあります。  
https://www.bunkamura.co.jp/museum/exhibition/22\_maryquant/



「マリー・クワント スウィング・ロンドンの伝説」  
東京・渋谷の「Bunkamura ル・シネマ」ほかにて全国順次公開中。  
アットエンタテインメント配給。



『マリー・クワント』  
マリー・クワント 著  
野沢佳織 訳 ¥2,860 晶文社  
ポップな回想録が詰まった  
マリー・クワントによる自伝。

『時代を変えたミニの女王  
マリー・クワント』  
ジュニー・リスター 著 中野香織 訳監修  
石田至矢子 翻訳 ¥3,960 グラフィック社  
モードの偉大な先駆者クワントの歩みをたどる。

「ミニスカートという服はクワント以前にもあったが、それは膝を少し見せる程度のスカート丈だった。ロンドンの革命児はミニスカートを大胆に更新し、その丈は膝上20cmにまで到達した。そしてクワントは人々に訴える。「自由に、自分らしく」と。  
「すべての人が自由で、自分らしくあることで世の中はもっと風通しよく、幸福度も増し、結果として経済も成長していくのではないのでしょうか。クワントの姿勢から学べる最も重要なメッセージではないかと思えます」  
スカート丈を20cm短くして世界を変えた女性。それがマリー・クワントだった。